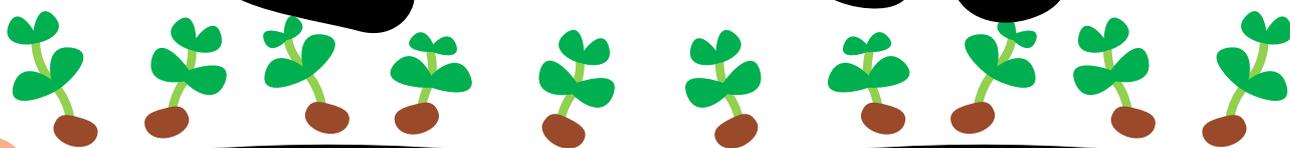


2024年版  
小学3・4年生

2024年1月~12月に発行された本の中から  
とくにおすすめの本をしょうかいします

ビーだまのようにキラリと光る一さつを

# ビーだま



ブックリスト「小学3・4年生」2024年版 No.56

【編集・発行】

富山市立図書館

富山市西町5番1号/TEL 076-461-3200

令和7年4月23日発行(年1回発行)



## バラクラバ・ボーイ

ジェニー・ロブソン／作 もりうちすみこ／訳 黒須高嶺／絵 文研出版



ドゥーガルのクラスに転校してきたトミーは、頭全体をすっぽりとおおったぼうしで、いつも顔をかくしています。なぜぼうしをかぶっているのかたずねても、トミーは教えてくれません。ドゥーガルは、親友のドゥミサ二とともに、トミーがぼうしをかぶる理由をさぐります。すると、次第にクラス中がトミーのひみつをとき明かそうと、むちゅうになっていきました。

## 机の下のウサキチ

岡田淳／作 偕成社



いつぱい  
一平がおじいちゃんの机の下にもぐると、いつのまにか広い草原に出ました。そこには大きなウサギがいて、一平は「おそかったじゃないか」とおこられます。ウサギは一平をまつ間に、まじよに「はねる力」を取られたと言うのです。力を取りもどしに行こうと、一平はウサギをさそいました。



## ひとつだけ守りたいもの

まも

リンダ・スー・パーク／作 ロバート・セーヘン／絵 佐藤淑子／訳

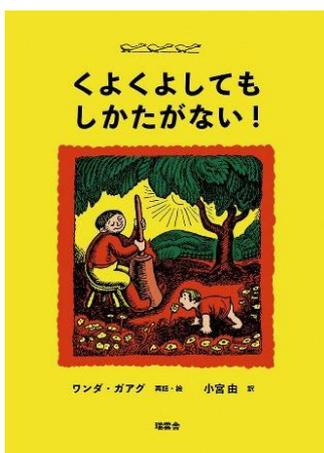
玉川大学出版部

先生から「家が火事になって、ひとつだけもちだせるとしたら、何をもちだすか」という宿題が出されました。子どもたちは一人ずつ発表しながら、自分にとって一番大事なものについて話し合います。朝鮮につたわる詩の形式をもとにしてつづられた、ものがたりし物語詩です。



## くよくよしてもしかたがない！

ワンダ・ガアグ／再話・絵 小宮由／訳 瑞雲舎



おひやくしょうのフリッツルと、おくさんのリアシは、毎日ねっしんにはたらいていました。しかしフリッツルは、家の中ではたらくリアシの方が、外ではたらく自分よりも楽をしていると言います。それならば二人の仕事を取りかえてみようと、リアシはフリッツルにていあんしました。

# まじよ 魔女がやってきた！

マーガレット・マーヒー／作 尾崎愛子／訳 はたこうしろう／絵  
徳間書店



デイビッドがお母さんとケーキを焼いていると、おいしそうなおいをかぎつけた魔女がやってきました。ずるがしこい魔女は、ケーキをもらうためにさまざまな魔法を使って二人をさそいますが、デイビッドはかんたんにはだまされません。

魔女がでてくる5つのお話をまとめた物語集です。



## 中国のフェアリー・テール

ローレンス・ハウスマン／作 松岡享子／訳 福音館書店

画家の下ばたらきをしているティキ・プーは、画家や弟子からかかれて、毎日こっそりと絵の練習をしていました。するとある夜、あこがれの画家ウイ・ウォニの絵から本人があらわれ、絵を教えてくれると言うのです。さしだされた手をつかみ、ティキ・プーは絵の中にとびこみました。



## おじいちゃんのおぼくの目

パトリシア・マクラクラン／作 若林千鶴／訳 黒井健／絵 リーブル



ジョンのおじいちゃんは、目が見えません。かわりに、おじいちゃんだけのやり方でみえています。

「おじいちゃんのおぼくの目」でみようとして、ジョンは目をとじました。すると、小さな音や、かすかなにおいが、まわりの様子を知らせてくれます。また、ジョンの指が、さわった物のことを教えてくれるのです。

# と しょ かん あこがれの図書館



パトリシア・ポラッコ／作 福本友美子／訳 さ・え・ら書房  
パトリシアは、ひっこし先の町でりっぱな図書館を見つけます。鳥と絵が大すきなパトリシアは、毎日のように図書館に通い、きれいな絵の本をながめてすごすようになりました。ある日パトリシアは、<sup>と しょ かん いん</sup>図書館員から「あなたにふさわしい本を見せるときがきた」と言われ、とくべつな<sup>へ や</sup>部屋にしょうたいされます。



## きみは、ぼうけんか

シャフルガード・シャフルジェルディー／文 ガザル・ファトゥラヒー／絵 愛甲恵子／訳  
ブロンズ新社

めちゃくちゃにこわされてしまった家や町。ぼうぜんとするわたしに、おにいちゃんは「ぼうけんかになりたくない？」とたずねました。ぼうけんかになると決めたわたしたちは、リュックをせおい、<sup>あん</sup>安全な町を<sup>き</sup>目指して、<sup>め ぎ</sup>長く<sup>たび</sup>きけんな<sup>しゅつぱつ</sup>旅に出発します。



## ミツツボアリをもとめて アボリジニ<sup>か ぞく</sup>家族<sup>たび</sup>との旅

今森光彦／著 偕成社



オーストラリアでくらすアボリジニにとって、ミツツボアリは大すきなおやつです。おなかにあまいみつをためたミツツボアリをとるために、アボリジニの家族は何日もかけて旅をします。

旅の道中は、高さ2メートルをこえるシロアリの<sup>す</sup>巣を見つけたり、アボリジニのお母さんがイモムシをのみ<sup>こと</sup>こんで見せたりと、おどろく<sup>こと</sup>事ばかりです。